

聖書：マルコの福音書 10：32～45

説教題：仕えるために来られた主

日時：2026年2月1日（朝拝）

「さて、一行はエルサレムに上る途上にあった」と今日の箇所は始まります。ここで初めて、この旅がエルサレムへと向かう旅であったことが明記されます。そしてこれとセットで重要なことは、そのエルサレムを目指してイエス様が先頭に立って進まれたとあることです。弟子たちはその姿を見て驚き、また一緒について行く人たちは恐れを覚えました。それほどまでにエルサレムへ向かって決然と進まれるイエス様のお姿があったのです。ご自分をメシアとして示しているイエス様がこのようにエルサレムへと向かう。それは何を意味するのか。いよいよ神の国が実現する時が来たのか。当時の世界の支配者ローマとの戦争が始まるのか。それともその前にエルサレムの宗教指導者たちとぶつかり、いわば内戦状態に入るのか。人々は並々ならぬ決意と熱意を持って進まれるイエス様の姿を見て、恐れを覚えたのです。

そんな彼らの様子を見て、イエス様は再び十二弟子だけを呼び、ご自身に起ころうとしていることを話し始められました。すなわち三回目の受難予告です。33～34節：「ご覧なさい。わたしたちはエルサレムに上って行きます。そして、人の子は、祭司長たちや律法学者たちに引き渡されます。彼らは人の子を死刑に定め、異邦人に引き渡します。異邦人は人の子を嘲り、唾をかけ、むちで打ち、殺します。しかし、人の子は三日後によみがえります。」これに先立つ二回の受難予告と比べると、いくつか新しいことがここに語られています。その一つはエルサレムという場所です。イエス様が苦しみを受け、殺されることはすでに語られて来ましたが、その場所がエルサレムだと明確にされたのは今回が初めてです。また「死刑に定められる」とあり、裁判を経た上での処刑となることが明らかにされています。さらに「異邦人に引き渡される」とも言われています。当時、ユダヤ人には死刑を執行する権限がなく、それができるのはローマだけでした。その彼らの手を通してイエス様は死刑にされます。そしてその三日後に復活します。この受難予告から私たちは二つのことを学びます。

一つはイエス様の受難と死は成り行きの結果、起こった不幸な出来事ではないということです。これは前もって繰り返し予告されており、神のご計画に沿ったものです。イエス様は敵にしてやられて死に追いやられたのではなく、すべてを理解した上で、

この受難へと進まれました。そこには父なる神のご計画に対するイエス様の従順が表されています。

もう一つは、神のご計画と摂理は細部にまで及ぶということです。特に 34 節には「嘲り、唾をかけ、むちで打ち、殺す」と具体的なことまで語られています。これを見てある人たちは「事柄が起こってからそう書いたのだ。そうでなければこれほど正確に書けるはずがない」としますが、大事なポイントは逆です。すなわち神のご計画と導きは大枠だけではなく、このような細部にまで及ぶということです。聖書の他の箇所では雀一羽一羽の動きも神が御心に留めておられると言われています。私たちの髪の毛さえ数えられているとも語られます。つまり神の配慮と導きは取るに足らないと思われるレベルにまで及んでいるのです。だからこそ私たちは逆に安心することができます。無意味なこと、神にとって予定外のこと一つもありません。たとえ私たちの目には悪と見えることが起こっても、すべては神の主権の御手の中にあります。その神の御手を仰ぎ見て、私たちは慰められ、信頼して従って行けば良いのです。

さて、この受難予告に続いて今回も弟子たちの無理解な姿が示されます。一回目の受難予告の直後にはペテロがイエス様をいさめ、「下がれ、サタン」と言われてしまいました。二回目の受難予告の直後には、弟子たちが「だれが一番偉いか」と論じ合い、戒められました。そして三回目となる今回も、彼らは同じような姿をさらけ出します。今回はヤコブとヨハネがイエス様のところに来て、「私たちが願うことをかなえていただきたい」と申し出ます。その願いとは、イエス様が栄光を受ける時、一人を右に、一人を左に座らせてほしいというものでした。彼らが思い描いていた栄光とは地上的な王国が打ち建てられることだったのでしょう。その時、その榮譽ある地位を自分たちに与えてほしい。その約束を今の内に取り付けておきたいという願いでした。

それに対してイエス様は「あなたがたは、自分が何を求めているのか分かっていません」と言われ、こう問われます。「わたしが飲む杯を飲み、わたしが受けるバプテスマを受けることができますか。」ここでの「杯」とは、イザヤ書 51 章 17 節にある「憤りの杯」と同じく、神の怒りを身に引き受けることを意味します。やがてイエス様がゲッセマネの園で「この杯をわたしから取りのけてください」と祈られる時の、あの「杯」と同じです。また「バプテスマ」とは旧約聖書における大水に押し流されるというイメージを背景にした圧倒的な苦しみを象徴しています。イエス様の右と左

に座りたいと願うなら、その前に、イエス様がこれから進まれるこの苦しみの道とともに歩む者でなければなりません。苦しみ抜きでただ栄光にのみあずかることはできません。あなたがたはその道に行くことができますか？とイエス様は問われます。それに対して彼らは「できます」と答えます。いかにも軽々しく感じられる返事です。彼らなりに真剣にイエス様について行く決意はあったのでしょう。しかしこれはまだ良く分かっていないからこそ言えた言葉でもありました。

イエス様はそんな彼らを全面的に否定されることなく、「確かにあなたがたは、わたしが飲む杯を飲み、わたしが受けるバプテスマを受けることとなります」と言われま。事実ヤコブは使徒の中で最初の殉教者となり、ヨハネは最後まで生き残り、パトモス島に島流しにされながら主を証しする生涯をささげます。主に従う者には、それぞれに定められた召しに従って、主の苦しみにあずかる歩みが備えられているという真理がここに示されています。これは避けられないものと言うより、むしろ主が与えてくださる恵み、ギフトでさえあるというのが聖書の主張です。

しかし、イエス様は続けてこう言われます。「わたしの右と左に座ることは、わたしが許すことではありません。それは備えられた人たちに与えられるのです。」それは父なる神がお決めになることであり、人間が計算や努力によって手に入れられるものではありません。それは父なる神に委ねるべき事柄です。この話を聞いて他の十人はヤコブとヨハネに腹を立て始めたと言われます。しかし彼らが怒ったのは、二人の願いが道徳的に問題だったからではありません。自分たちが危うく出し抜かれそうになったことに気づいたからです。言い換えれば、彼らもみな高い地位を望んでいたのです。だからこそ先抜けは許さん！という思いで腹を立てたのです。

イエス様はそんな彼らと呼び寄せて言われたと言われます。ここでイエス様は異邦人の支配者と神の国のリーダーとの違いを改めて教えられます。異邦人の支配者たちは人々の上に立ち、権力を振るい、力を誇示して支配します。実は今弟子たちが示していた方向性もこれと同じものでした。彼らはローマ帝国の支配に反感を抱きつつも、自分たちもまた上に立ちたいと願っていたのです。国が変わり、自分たちが偉い地位に就き、人々を従わせたい。そうであるなら神を知らない異邦人のあり方と何ら変わりません。

これに対してイエス様は「しかし、あなたがたの間では、そうであってはなりません」と言われます。では私たちの間ではどうあるべきなのでしょう。ここにこそ今日の箇所です。私たちが良く耳を傾けるべきメッセージがあります。イエス様はまず「あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、皆に仕える者になりなさい」と言われました。この言葉は誤って理解されやすい言葉でもあります。将来偉くなるために、今は仕えなさい。祝福を得るために、今は我慢しなさいという意味に受け取られることがあるからです。しかしイエス様は、そういうことを言われたのではありません。ここで言われている「偉い者」とは「偉大な者」という意味です。つまり神の国で偉大とされる人とは皆に仕える人である。そういう神の国の価値観が教えられているのです。「仕える者」とは「給仕する者」、召使いのような立場を指す言葉です。そのように人に仕える者こそが神の国では偉大な人なのだと言われます。私たちはこの神の国の基準を理解し、受け止め、これに沿って歩むようにと招かれています。

さらにイエス様は「あなたがたの間で先頭に立ちたいと思う者は、皆のしもべになりなさい」と続けられます。ここで言われている「先頭に立つ」とは「一番になる」あるいは「第一の者になる」という意味です。つまり神の国で一位の順位を与えられる人とは皆のしもべとして仕える人である。そういう御国の価値観をイエス様は教えておられるのです。しかもこの「しもべ」という言葉は、より直接的に訳せば「奴隷」です。奴隷とは自己主張せず、ただ他者のために生き、他者の益のために仕える存在です。そういう奴隷が一位であるとは、この世は決して考えないでしょう。むしろ一番下に置かれます。偉くはない人。だから誰もそうなりたくない。しかし神の国では奴隷が一番なのだということです。ここに根本的な価値観の逆転があります。神の国はそうなのです。つまり私たちの感覚が間違っているのです。罪によってひっくり返っているのです。だから下になりたくない。上に立って威張りたいと思っている。しかし神の国で偉大とされ、また一番とされる人とは、皆に仕え、しもべとして生きる人です。これが神の国の価値観なのです。そしてそれは永遠にそうなのです。ですから私たちはより高い者となるための便宜的な方法ではなく、永遠の御国の基準として、これに沿う歩みこそを目指して行くべきなのです。

そして最後の 45 節で、その決定的な根拠が示されます。原文には「というのは～だからです」と理由を示す言葉があり、なぜここまでのことが言えるのか、その理由がここに集約されています。それはすなわち、人の子であるイエス様ご自身が何より

もそのような方であられるからということです。イエス様はここで「～するために来たのです」と言っておられます。「来た」という言葉は、イエス様がこの世に生まれる前から存在しておられる永遠の神であることを前提にしています。世界の歴史が始まる以前から存在しておられる神ご自身が、人となってこの世に来られた。その目的がここに語られています。まず「仕えられるためではなく仕えるために」来たとあります。本来イエス様は神として仕えられるにふさわしいお方です。すべての賛美と栄光を受けて当然のお方です。「人々に仕えてもらうために来た」と言われても、私たちの感覚からすれば不思議ではありません。しかしまことの神なるお方はそうではないのです。イエス様は仕えるためにこそ来られました。神の国で第一であられるお方が仕えるために来られたのです。

さらに「また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために」来たとあります。これは仕える歩みの究極的な姿です。ここで言われている「贖いの代価」とは身代金を意味する言葉です。かつて奴隷や捕虜を解放するために支払われた代価を指します。私たちもかつては罪の奴隷状態、束縛状態にありました。その状態から解放されるためには代価が必要です。しかし誰一人としてそれを支払うことはできません。私たちは皆、神の前に返すことができない罪の負債を負っているからです。しかし、罪のないイエス様だけがご自身のきよい命という尊い代価を払って私たちを贖い出すことができます。しかも神が人となって支払われた犠牲は一人分にとどまらず、多くの人を救い出すに足る価値を持っています。イエス様に信頼するすべての人を救うことができます。イエス様はその代価を支払うために、この世に来られました。その目的のために、天の栄光を捨て、この時エルサレムを目指し、意を決して進んでおられたのです。ここに神の国で第一位であられるお方の姿があります。そして神の国に生きる私たちもまた、この方に倣って歩むようにと招かれているのです。

さて私たちはどちらの価値観で日々を歩んでいるのでしょうか。世の価値観でしょうか。それとも神の国の価値観でしょうか。私たちもまた弟子たちと似た者であることを思われるかもしれません。地位や名誉を求め、人に仕えることよりも、人から仕えられること、多くの人を従わせることができることを喜ぶかもしれません。しかしそれはこの世の支配者のあり方であって、イエス様ははっきりと「あなたがたの間では、そうであってはなりません」と言われました。私たちに必要なことは、もう一度イエス様ご自身をよく見つめることです。イエス様の生き方にこそ神の国の価値観、

基準がはっきりと現れています。天の栄光を捨てて人となり、この世に来られたのは私たちに仕えるためでした。そしてその尊い命をもって、私たちが贖う代価を払うため、エルサレムへと決然と進んで行かれました。私たちは感謝をもって、このイエス様を見つめ、その後に従う者として導かれたいと思います。

そして今日は杉並教会設立満 67 周年を覚える記念礼拝の日でもあります。この日に私たちは、ここまで導いてくださった主の恵みを覚えて感謝します。しかし同時にこの日、私たちがこの箇所を通して自らに問い直すべきことは、果たして私たちは、このイエス様が示された価値観と生き方に倣う歩みをしているだろうか？ということではないでしょうか。もし私たちの内にヤコブとヨハネのような思い——地位や名誉や力を求める心——があるなら、それはイエス様の心とは相容れません。そのような姿勢は神の国や教会を建て上げるものではなく逆に壊すものです。そういう思いがあるなら私たちは戒められなければなりません。むしろ今日の御言葉を通して思わされることは、教会は実はイエス様に倣い、仕える人々の歩みによって導かれ、祝福されて来たということです。もしかして私たちがあまり良く認めては来なかった人、人が目を向けない中でも仕えてくださった方、皆のしもべとして身をささげてくださった方々によって杉並教会の今日までの歩みも導かれて来ました。そのような方々の歩みと奉仕こそが、この教会の祝福の基礎だったのです。もちろん、すべての土台は「仕えられるためではなく、仕えるために来た」と言われた主ご自身です。その主に導かれて仕える歩みをささげてくださった多くの先達たちを通して杉並教会のここまでの歩みが守られ、祝福されて来ました。その恵みの上に今日立たせていただいている私たちです。その私たちが、今度は感謝をもって、その後に続く者となることへと主は今日の御言葉を通して招いてくださっています。

私たちはこの日、「仕えるために来られた主」に何よりも感謝をささげ、またその主に倣い、仕える歩みをもって教会の祝福のために身をささげてくださった方々に感謝して、自らも主とその方々に倣う歩みへ進む者たちでありたいと思います。そしてこの世とは異なる神の国の素晴らしさを証しし、永遠の御国の完成のために用いられる主の教会の使命と光栄に一層導かれて行く者たちでありたいと願います。